

アジア多国籍医師団結成

今夏、ジブチへ第一陣

アジア、アフリカで難民の医療救済活動を続けている「アジア医師連絡協議会」市内のホテルで国際執行部



アジア多国籍医師団の発足を宣言する菅波代表（正面の立っている人）

会を開き、十四か国と香港の医師約五百人で作る「アジア多国籍医師団」を結成した。専門医を被災国にすみやかに派遣、国境を越えた緊急医療に当たるのが目的。第一陣は今夏、ソマリア難民が流入している北アフリカのジブチに派遣される。

執行部会には、AMDAのアジア各国支部の医師二十五人が出席。菅波代表が二十一、二十二の両日、国内外の医師や大学教授、宗教家が集まって岡山市で開かれた「多国籍医師団構想を考える国際シンポジウム」で構想が全面支持されたことを報告し、全会一致で結成を決めた。

シンポジウムでは、欧米のNGO（民間活動団体）が現地との文化や慣習の違いからトラブルを起している例が報告され、「救援のためには、医師が現地の文化を知ることが重要」として、専門家にアドバイスを求めていくことにした。ジブチには現在、約十万人の難民が流入しており、多国籍医師団は同国の難民キャンプで診療を行い、北部ソマリアを中心に巡回診療もする。第一陣は日本、ネパール、パキスタン、バングラデシュの医師で構成する。



各国支部とコンピューター通信で結び、迅速で効果的な医療救済を行いたい」と意気込んでいる。